
If ariveD

宮利 衛斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If arrived

【Nコード】

N4071A

【作者名】

宮利 衛斗

【あらすじ】

とある一人の学生がひょんなことをきっかけに友達になった女の子、その子は人間じゃなかった。主人公はそんなことを気にもかけなく、普通に接していく。ある時、女の子は主人公の目の前で・・・

「だって、なんかならない？メイデン」

とあるmailを見て、後ろを見ながら言葉を放つ。

そこには一般人には空気と認識できる空間しかなかった。

だがその大気しか存在しないはずの空間からは可愛らしい少女の声が響く。

「気になるってんだし、教えてあげたら？」

メイデン、それが空間からする声の主だった。

彼女はメイデン、ボク、圭介がつけた名前だ。

名もないただの浮遊霊でしかなかった彼女を圭介が手を差しのべ友達になった。はるか100年以上昔、彼女はイギリスの奥地で謎の急死。

その後、日本にたどり着いた。

が、知り合いもない彼女は途方にくれ、ひたすらに泣き続けたという。

そこに圭介は現れた。

「いやだって一応、あれだしさ」

言って良いものと戸惑う、しかしメイデンはメンドクサイからか言ってしまうと圭介を促す。

「いいじゃん、知りたいって言うんだもん」

多少強引である、それが彼女だ。

容姿とは裏腹に積極的であり、強引、だけど時折かいまみせる表情はいかなる生物であろうと見惚れるであろう可愛らしいものだった。

「うーん、だけど知に悪いしな」

彼女の催促に多少反発の色を見せる。

知とは圭介の友人のひとり、義理の妹を持つ一学生だ先程から話題になっている教えてやれ、いや悪いのやりとりは、拓海にmailで聞かれた内容、さくらって知の妹の名前なの？というもの。

その知に悪いという意識から圭介は返信に困っていたそしてメイデンに話かけたのだ、結果今に至る訳なのだが。

「うーんまあ仕方ないか、っと」

妹の名前という肯定のmaierを拓海へと送る。

「これでいいんだろ？」

「そついい子だいい子だ」

クスクスと笑い、圭介を見る。

「なんだよ、お前が送れって言ったのに」

何故か笑われたことに照れ臭さを感じ、メイデンから目を背ける。それに対しメイデンは当然の如く圭介をからかう。

「ああ、照れてる、私に誉められたのが嬉しいの？」

圭介が目を背けた方向に周りこみ顔を覗きこむ。

「っ！」

可愛らしい純真な顔、圭介自信あきらかに自分とは不釣り合いと認識する女の子それを目の前にし赤面する、そして赤面を自覚する。

「ふふ、圭介は照れ屋だね」

微笑み顔を横に傾け覗き込む。

「別にそんなんじゃないよ、ただ」

その先の言葉につまる。

「ただ何？」

先が気になるのか、答えるよう促す。

「別に、さてともう寝る」

答えを曖昧模糊のままにしベッドに登り冷たい布団に潜り込む。

朝起きたままのグチャグチャになった布団を足と手を使い直していく。

どんなに綺麗にしても結局は冷たいまま、暖かくなてならない。ただ昔とは違い、今は隣にメイデンという少女の居るおかげで心はもの凄く、有り余るくらいに暖かった。

翌朝、土曜日。

今日は学校が休み、バイトも休み、全てが休みの珍しく休養がとれ

る数少ない日、圭介はまず側で意味もなく眠るメイデンに声をかける。

「おいメイデン、朝だ起きろ？」

側で寝ているということに異論を感じずメイデンを起こす。

「うーん、幽霊は朝が苦手ー、だから寝るの」

ゴニョゴニョと寝惚けた口調で寝返りをうつ。

「寝る意味も無いのに良く言うよな」

苦笑しダルい体をベッドから下ろす。

とりあえず、数分ベランダからランドマークタワーをボーツと見つめる。

眠気からか景色がユラユラと歪んで見える。

なんか世界が回転してるような・・・

「く・・・」

違う、眠気で歪んでるのでは無い。

これは俗に言う目眩。

ただ、普通の目眩とは違い、自立神経系の失調からくる特殊なものだと言われている。

「くそ、またかよ、毎度毎度、気持ち悪・・・」

ついには吐気まで催してくる始末こうなったら、立ってなんかいられない、目を開けていることすら難しくなってくるたちの悪い精神病。

これが憎くて仕方がない。成す術もなく、先程まで安眠を分け与えてくれていた布団へと戻る。

「どうしたの圭介、また目眩？」

寝惚け眼を擦り、もう一度布団へと戻ってきた圭介に声をかける。

「みたいだ、これまた神様も酷いな、数少ない休みを目眩で潰さすなんて」

と、神様に文句を言っても仕方がない。

運命だと思って素直に受け入れる他ならないと圭介は感じる。

「それは、辛いね、じゃあ私ここで圭介の介抱してあげるよ」

狭いベッドで幅を取る正座をして圭介を見る。

「いいよ、いいよそれよりボクも寝る訳だし、幅取るから下で時間潰してた方が楽しいぞ、どっか飛び回るとかね」

実際幅を取るのなんかどうでも良かった、ただ年頃の少女が側で自分を介抱するという事に抵抗があった。

「それに、メイデンは何か未練を満たす度に成仏しちゃうんだから、あまりこーゆうのも良くないと思うし」

そう、メイデンは未練があつてこの世にとどまっている。

その未練とは彼女から聞かされていないが、彼女が話してくれない限り、無駄に詮索する気もなかった。

そして未練が完全に無くなった場合、結果成仏して消えてしまう。

そんなことは絶対に嫌だった。

せつかく巡り会えたのだ、もう離れたくない。

彼女もそうであつて欲しい、圭介はそう望んでいた。

「大丈夫だよ、私の未練はこんな介抱とかじゃないしね」

「そうか、まあ好きにしてよ、ボクは寝るから」

そう言つてまぶたを落とす、目の前には漆黒ばかりが広がっていた。

「・・・ん？」

いつの間にか、外は夕暮れ時になり、紅色の空が広がっていた。

「四時半、そんなに寝てたんだ」

だいたい五時間くらいだろうか、そのくらいの間ずっと眠っていた。そして隣にはメイデンがいた。

こころなしが姿が薄くなったメイデンが。

「あつ、起きた！もう平気なの？」

圭介の思考を遮るようにして調子を訪ねる、本人には思考を遮るそんな気は無かったのだろう。

が、圭介には遮られたようにしか感じられなかった。

「だいぶマシかな？まだ少し気分悪いけど」

世界が回る感じがしなくなっただけ、まだマシと言うものだ。

それだけ回復しているということだし。

「そ？良かった」

回復したということを告げるとメイデンは表情を緩めにこやかになった。

「じゃ、もう平気だね！」

「まさか、ずっとここにいたのか？」

「うん、暇だったし」

何普通に素気なく答える。五時間もの間つきつきりでこの狭い空間にいたなんて、考えるだけで体が痛くなる。

「それに、なんか楽しかった・・・かな？」

微笑み、背を向ける。

その姿を見て圭介はふと思い出す。

起きた瞬間に見たメイデンが心なしに薄かったことに。

「てか、メイデン、なんか薄くなってるかい？」

「え？え？？そんなことないよ？」

少し挙動不審になりながらも必死に弁解？をする。

実際、そんなにハッキリと分かるほど薄くなってるのか分からない。ただ、長い間の付き合いでなんとなくそんな気がしたただけの話であり、確信など全くない。

「ならいいけど、ありがとな？わざわざ傍にいてくれてさ」

照れ隠しに鼻頭を掻きながら礼を言う。

「ふふ、いいのなんか嬉しかったし」

この笑顔がたまらなく好きだった

翌日曜日

ふと目が覚めると、体を起こすのがつらかった。

頭も痛いし、喉が痛む。

「まさか風邪とか無いよな」

体の節々が痛む中、必死に体温計を持ち出し脇の下に挟む。
冷たい体温計が体を刺激する。

ピピツと音が鳴りだるい手を脇の下に伸ばし体温を確認する。

38.2・・・

「はあ！？マジかよだるゝ」

完全に風邪であることに間違いは無かった。

「圭介、風邪？」

心配になったメイデンが圭介の傍へとやってきて体温計を見る。

「わっ高い！早く寝ないと」

「ゴメンな、昨日に続いて今日も・・・ボクなんか放つとしてもすぐ元気になるからメイデンは気にしなくていいから」

昨日ずっと付きつきりだったメイデンに謝罪をする。

「いいから、早く寝て」

半ば無理矢理にベッドに寝かし、布団を首もとまでかける。

体温が高いからかえって暑いが、あえて何も言わない。

「それに、私こーゆうのなんか嬉しかったりするし」

急に神妙な顔付きになって話を始める。

「これが私の未練、望みだからね」

「それって！」

だるい体を起こし、メイデンを一直線に見据える。

「昔、高熱に苦しんでる兄様を助けてあげられなかった・・・ずっと一晩付きつきりで見、た、のに・・・」

つぶらな瞳に僅かに涙が溜り始める。

「悔しかった、兄様を助けてあげられなかったのが、だから次は助けるそう決めたとき、気付いたら私死んじやってた」

それが、メイデンをこの世に留めている理由だった。誰かが病気で苦しんでいる時、横で必死に看病し助けてあげる。

それが彼女メイデンのたった一つの望みだった。

顔に水が落ちる。

見るとメイデンは涙を流していた。

「泣くなよ」

それだけ口にし触れるはずもない霊体の顔に触れそつと涙を拭う。

涙はしっかりと実体を持ち、確に指は濡れた。

「触れる、圭介に触れる触ってもらえてる、私消えるんだ・・・」

メイデンが実体を持った。それは神様が最後の最期、成仏する瞬間に与えてくれた奇跡だった。

この瞬間を、

少しでも、

有効に、

使う。

「なあ、ボクずつと言いたかったことが」

言葉の途中そつと人指し指が口の前にそえられる。

「知ってる、私もだから」

心が一つになった。

そして、顔を近付ける。

少しずつ少しずつ・・・

「ばいばい、圭介・・・」

唇同士が重なる一歩手前、あと数センチというところで、メイデンは圭介の前から一瞬にして姿を消した。

「メイデン・・・」

「メイデン、メイデン」

ひたすらに彼女の名前を呟く。

「なんでだよ！おかしいだろ！消えんなよ！おい！！」

誰もいない部屋で力の限りに叫ぶ。

「帰って・・・来いよ・・・メイデンー！！！」

枕に顔を埋めて泣いた。

枕が涙で濡れるまで、メイデンにこの気持ちが届くように。

「あれから１年・・・か」

メイデンが消えてから１年が過ぎた、今日１月２日何と言う理由もなく、大好きな景色も見えるお気に入りの場所へと歩を進めた。

あの日以来、なんのやる気も起きなく、他の女の子になんか興味も

沸かなく、彼女が頭から一瞬たりとも消えることは無かった。
繋がった想い。

交されるはずだった愛の誓い。

その最中、彼女は目の前から一瞬にして消えた。

無事に天国へ着けただろうか、幸せに暮らしているだろうか。

そんなことを急に寂しくなった背中と共に空を見ながら思う。

あの日空は快晴だった。

彼女の心を映し出したかのように澄みきった青。

「今日も快晴だな」

寂しくなった背中に話しかける。

当然返事など有るわけもなく、声は消える。

「もう、帰るか・・・」

お気に入りの景色から目を離し、後ろを振り替える。そこには、ひとりの少女が立っていた。

どこか見覚えのある。

いや見慣れたその姿。

具現化されたその姿。

それは

「メ、メイデン・・・？」

そういつか消えた霊、メイデンのそれと酷似していた。

「メイデンなのか？」

夢中でその少女に問掛ける。

「圭介・・・そうだよ、私だよ」

涙が溢れた

目の前にいるのは正真正銘いつかのメイデンだった。

「圭介！」

彼女も瞳に涙を浮かべ、空中に煌めかせ小走りに圭介の元へと駆け寄る。

そして、圭介はそつとその柔らかい形のある実体のある身体を抱き締める。

「どこに行つてたんだ、メイデン」

大好きな景色を背にメイデンを問う。

「ごめんなさい、お出掛けしてたつてことにしてね」

微笑む、そして寄り添う。

「出かける時くらいボクに一言言つてくれよな」

「えへへごめんなさい」

背中が暖かい、何故か先程までの冷たさと不甲斐無さも完全に消え、目の前の少女が胸に広がり、暖かさだけを残す。

「あの時、できなかったあれ・・・」

顔を微かに紅く染め、圭介を見る。

「ああ・・・」

照れて、それ以上は何も言う事が出来ず、そつと体を近付け密着させる。

そして唇が重なる

今度こそはしっかりと確実に。

もう離れない、離さない、その想いと共に。

「これからずっと一緒だ、な？メイデン」

「うん！圭介」

涙を拭い、満面の笑みを浮かべ答える。

これは、ボクとメイデンのこれから始まる

ただ一つ、世界でたった一つの

『恋物語』

（後書き）

どうも宮利衛斗です。ようやく書き上げた記念すべき一作目ですが、いかがでしたでしょうか？ありえない話の詰め合わせですが、楽しんで頂けたら、幸いです（笑）では機会があつたらまた、お会い出来る事を祈って

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4071a/>

If arived

2010年10月21日07時10分発行